ハーツホーンの地理学の見解に関する覚書

加　藤　英　生

人文社会教室

(1979年9月8日受理)

A Note on Hartshorne's Views of Geography

Hideo KATO

Department of Humanities

(Received September 8, 1979)

This paper examines Hartshorne's views of geography in his "The Nature of Geography" published in 1939. Then we propose: the pursuit of the laws that regulate the spatial aspects of things on the surface of the earth; the concept of region as a basic framework in which to seek knowledge; chorology or regional geography based on the temporal and spatial points of view.

I

1939年のアメリカ地理学者協会の機関誌(A. A. A. G.)の2号と3号とにわたって，ゆうに一冊の書物に匹敵する分量のモノグラフが掲載された。それはハーツホーンHartshorneの『地理学の本質』と題する論文であった。

このように異常に長い論文が掲載されることになった背景には，著者がそれより一年前に同誌に投稿した論文を，編集者と原稿を評読した人々の示唆に従って，徹底的に改訂するという経緯はあるが，編集者の言葉によれば，何よりもこの論文のもつ価値ゆえに，上述のような前例のないことが断行された。そしてさらに，その内容が地理学者を志す大学院学生のテキストとして適当であると認められた結果，これに相当大幅な増補が加えられ，1946年に同協会から単行本の形で再版された。その時からこの書物は，その考え方が支持を受けるにしろ，受けないにしろ，地理学のいとなみに関心をもつ者すべてにとっての基本的文献となった。

この著作でハーツホーンが明らかにしようとしたのは「個人的見解を述べるかわりに……地理学者たちは，これまで地理学においてどのように仕事し，これをどのように把握していたかを検討し，それによって地理学は何であるかを決定し，学問の一分野としての地理学の特色や性能を決定する」(邦訳，1957，p. 1，本稿の同書引用文ならびに末尾のページ数はいずれもこの訳書による)ことであった。彼の考えでは，既に学問分野の確立されている地理学においては，先験的仮説から出発する理論的思惟の結果は，それに何らかの価値があるとしても，単にその人ひとりの見解を表わすにすぎないのであって，「地理学者の方法論について発表した研究論文，あるいは彼らが地理学の実地研究について行った精密な分析こそが，地理学の性格と領域とについての信頼のおける定義を築きあげることのできる材料源」(p. 18)なのである。このような考えの下に彼は，ほとんど二百人を数える地理学者たちの研究論文を学説史的にとりあげ，「たとえばHumboldtとRitterの作品についていうと，19世紀に6人の学徒が非常に骨を折って試みた批判を利用すること，これらの各批判をたがいに対照的位置において検討すること，またこれらの批判を……といった人々の結論と対立させて検討すること，同様に原論文の部分部分に当ってみて，これらの批判を検討することなど」(pp. 18～19)の厳密な文献考証学的研究を行っている。その点では，ハーツホーンの述べていることは著者の個

人的な見解でない，といえるかも知れない。しかし，そこで彼は他の地理学徒の見解を評価し，選択し，総合し，地理学の本質とそれから導かれる研究方法についてひとつの結論を提示しているのである。したがってその結論に到達する彼の考え方については，われわれは少なくとも議論できるし，またそれを必要としているのである。

学説史的な検討を通じてハーツホーンが明らかにしたのは，多くの地理学者にとって地理学は，何よりも方法科学たることにより他の科学の大部分から区別されていたこと，その研究の核心は地域地理学にあって，究極的目的が地域的相違の把握にあるということであった。彼によれば，この見解を最もはっきり表明したのはヘットナー Hettner であった。それゆえ，ヘットナーの見解* を祖述することに発し，さらに古今の重要文献を渉猟し，それらを著者独自の立場から総合して著わしたのが『地理学の本質』であった。そこに論述された見解は，合衆国のみならず，わが国の地理学研究にも多大の影響をあたえ，今日にいたっているのである。

ハーツホーンの論文が発表されてから既に40年が過ぎようとしている。この間に，科学や技術は飛躍的な進歩をとげ，また各国の社会事情や国際関係も当時とは一変した。このような新しい情勢に従来の地理学が適応できない状況に対して，地理学徒のなかに反省と批判の気運が生じ，1950年代以後アメリカを中心に地理学の革新運動が起った。その直接の発端はシェーファ Schaefer の論文であった (Schaefer, 1953)。この論文は，20世紀初頭以降支配的であったヘットナーの地理学方法論，とりわけそれの継承とアメリカ的発展であるハーツホーンの方法論を痛烈に論難するものだった。シェーファによれば，彼らの地理学に関する見解には，「地理学は他のあらゆる科学と全く異なり，いわば方法論的にユニークである」(p. 231) という一つの共通の主題がさまざまな形で表現されているのである。そして彼は，「この立場はいくつかの変形の中で有力で持続的なものだから，これにはそれ自体の名前をつけるに値する」(p. 231) といって，「例外主義 (exceptionalism)」という名を付与したのである。この明確で鮮烈な表現は問題の所在を一言で示すものであった。つまり，地理学をユニークな方法論をもった総合科学，すなわち個性記述的な地誌的科学，例外的事例のみを研究する学問と考えるのは間違っているということであった。そして，他の社会諸科学と同じように，地理学の研究においても法則とか一般化の追求が必要なことを主張したのである。

シェーファの論難に端を発する「新しい地理学 (New Geography)」の革新運動の進行は，その後の地理学研究に「革命」とよばれるほど急激で根本的な変化をもたらした。総合・個性・記述・解釈にかわって分析・法則・説明・予測が強調され，仮説・モデル・理論・計量が叫ばれるようになった。また，環境とか地域という用語にかわって空間とかそれを用いた表現が頻繁に使われるようになった。しかし，近代地理学の古い伝統を受け継いだ国々では，新しい方法や概念の普及は緩慢であった。とりわけ，ドイツとフランスの地理学研究の影響を強く受けてきたわが国の地理学界においては，現在でも旧来の地理学観が支配的であり，多くの学徒は新旧ふたつの見解の間で動揺しているように思われる。それゆえ，この際ハーツホーンに立ち戻って，彼が展開した論旨に内在してその見解を吟味してみることは無意義でないであろう。なぜなら，シェーファの論文はハーツホーンらの論説の個々の誤りの修正を目指したものではなく，異なった視点の重要性を説くものだったからである。このような考えから，前述の名著『地理学の本質』に現われたハーツホーンの見解の若干についていささか検討を加えることにした。

II

『地理学の本質』を通読して，膨大で精確な原典引用に驚嘆する反面，饒舌気味とも思われる論述と博引ぶりに抵抗の念を禁じ得なくなるのは筆者だけでなかろう。そのような叙述の過程でハーツホーンが最初に明らかにしたのは，地理学がコログラフィ的科学であるというこ

* 地理学の本質や方法に関するヘットナーの見解と研究成果の要点は，その主著『地理学，その歴史，その本質およびその方法』(1927) にまとめられている。この著作のなかで彼は，哲学者であるとともに地理学者でもあった I. Kant の見解を援用して，科学全体のなかに地理学を位置づけ，地理学に一元的体系を与えるための方法論を展開した。すなわち，カントが「経験に関する認識は概念かまたはそれの具現する時間と空間とかによってえることができる。概念による区分は論理的なものであるが，時間や空間によるそれは自然的なものである。」(Hettner, 1927, S. 114) と述べている点に着目して，まず科学を抽象科学と具体科学ないし経験科学とにわけ，後者のなかに「系統的ないし事物的科学，年代的ないし歴史的ないし時間科学と並んで，地誌的ないし空間科学が成立すべきである」(Hettner, 1927, S. 116) と論じた。しかし，ここで注意しておかなければならないのは，カントの場合，経験を認識する観点がまず二つの観点にわけられ，そのうちの一つがさらに二つの観点にわけられているのに対し，ヘットナーの場合には最初から三つの観点にわけられている ことである。このような違いから生ずる方法論上の相違については，松井 (1966) の論文を参照されたい。

とであった。彼はまずこの考えが近代地理学の発達を通じて斯学の中心課題であったことを学説史的に論じ，次にそれが“所かわれば品かわる”というような諺から常識的にも納得されることだという。しかもこのような地理学の学的性格は，幾人かの先学によって科学の諸部門の論理的な配置のなかに合理的に位置づけられているのだという。彼によれば，このような位置づけは，カント Kant, フンボルト Humboldt およびリッター Ritter が大体似たりよったりの言葉で説明し，ヘットナーがその考えを最も十分に発展させたのである。それゆえ，「彼の述べているところを詳しく紹介することはいいことであろう」(p. 147) といって，ヘットナーの見解を長々と引用している。そのうち，われわれの検討に必要な主要部分のみを抜き書きすれば次のとおりである。

「実在は同時的に三次元的空間である。したがってその全貌を理解するには，われわれは三つの異なった見地から検討しなければならない。これら三つの見地の一つだけからの検討は一面的にすぎず，全貌をつくすことができない。第一の見地からは相類似したものの相互関係が見られる。第二の見地からは時にともなう発展が見られる。第三の見地からは空間における配置と区分とが見られる。」(p. 148)

「系統科学は時間的関係や空間的関係を問題にしないで，対象とする主題の客観的類似性の中にその統一を見出す。」(p. 148)

「歴史科学にとっては物質的関係が重要性をもつことがあったとしても，それは単に偶然的なものにすぎない。むしろ歴史科学では物事の時間的推移という見地から，全く異なった系統的範疇に属する多くの物事を一つにまとめてその統一をうるのである。もしもこれらの物事がただ偶然的に時間の上で相前後するだけであり，各種の現象集団の時間的推移がたがいに無関係であるならば，科学というものはただ単に系統的研究だけで満足できるであろう。しかし異なった時代と時代との結びつき（それをわれわれは発展という言葉によって表現する），および同一時代内での結びつきは，系統的研究とは別個の歴史的研究を必要とする。」(p. 148)

「時間における発展と同一の根拠から，空間における事物の配置もまた特別の研究を要請する。系統的もしくは物質的科学や，時間的もしくは歴史的科学とならんで，地域的もしくは空間的科学が発達しなければならない。」(p. 149)

「この空間的科学は二つなければならない。一つは宇宙における事物の配置を対象とするものである。……もう一つは，地球についての空間的配置の学，もしくは，われわれは地球の内部については知るところがないのであるから，地球の表面上の空間的配置の学といってもよいだろう。」(p. 149)

これらの引用文からハーツホーンは，「第二のコロロジー科学としての地理学は，地球の表面における空間的配置の学である」(p. 150) という見解を導き出し，それをさらに展開させていく。彼の論述を整理しながらそれをみていくことにしよう。まず，地球上の異なった場所と場所との間や，同じ場所における異なった現象の間には，系統科学や歴史科学によっては見出されないような関係が存在するので，上述のような性格の科学が必要なのだという主旨のヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ Vidal de la Blache の竟見を紹介し，その直後にまたブラーシュの「地理学はそれぞれ異なった地域や場所の特質を研究する……それは大陸，地域，地区，小地区そのものを研究する」(p. 150) という文章を引用している。次に，幾人かの地理学者や哲学者の見解に断片的に触れ，ヘットナーの学問体系を批判するのに十分なほど哲学的基盤をもつ地理学者や，現実の地理学の学問分野について十分な認識をもっている哲学者はいないという。そして最後に，クラフト Kraft の見解を部分的に評価しながらも，彼が「地理学的研究の対象となるものは……地球上でそれぞれ場所を異にするに伴って見られる地域的相違である」(p. 152) というヘットナーの地理学の定義の大事な要素を見逃しているがゆえに，地理学が人間現象や文化現象に対して不可避的に認めている高い地位を論理的に正当化しえなかったのだと批判する。ハーツホーンによれば，「地表の地域的相違ということを考える場合には，人間現象は……大きな重要性をもったファクターとなる」(p. 152) からである。

以上の論述にみられるハーツホーンの考えを要約すると，地理学は地表上の空間的配置の学であって，様々な広がりの地域そのものを研究し，その地域的相違を人間現象を中心に究明する科学である，といえよう。そうだとすると，次の問題はその研究の中にどのような事象ないしデータを取り入れたらよいのかということになろう。なぜなら，地域に関連をもつ事象は数限りなくあり，またそれらは直接にしろ，間接にしろ，いずれとして相互に関連のないものはないからである。したがって一定の見地に立つことなしに，事象ないしデータの選択を行うことは不可能に近いといってよい。この問題について彼はどのように考えたかをみてみよう。

ハーツホーンの考えに従うならば，他の諸科学が研究対象とする様々な事象を地理学が取り扱うからといって，その統一性が損われることはなくなる。なぜなら，地理学には固有の対象領域はなく，空間的視角から様々な事象へ接近する一つの仕方があるにすぎないからである。

このことは，地理学が多くの専門化を必要とするようにはなっても，それの解体をもたらすものでないことを意味する。つまり，地理学の多様性と統一性とは両立し，地理学の位置づけに関して引き起されていた問題の多くは解決される。しかしその反面，このような地理学の位置づけは，その研究分野を際限もなく広げるという新たな問題を産み出す。この点についてハーツホーンは，「地理学を系統科学よりはむしろ統合 (integrating) 科学であると理解している人々は，相寄って地域の性格を形成している広汎多岐な現象の多様性から逃れようがないことを認めている」(p. 211) というのであるが，そのような諸現象の総体を取り上げることは不可能であるから，何らかの基準によってその中から地理学にとって意味のあるものを選択することが必要となろう。彼の場合，それが何であるかがまず尋ねられなければならない。

上述の問題に関連してハーツホーンは，次のように自から発問し，それに答えている。「一地域で観察されるひどく性質の異なる物質的および精神的諸現象の中で，どれとどれとが地理学にとって意味があるのであろうか。その研究……の目的がいろいろ異なった種類の現象についてどれが意味があるかの規準を与えるであろう。……われわれはこの問題を……地理的知識を増進させるという見地から検討する。このような基礎に立つとなると，われわれとしてはデータの選択がなんらかの直接的でない目的によって……決定されるのを許容するわけにはいかない。……端的に結論を述べるならば，データを択ぶにあたっての根拠は，地理学についてのわれわれの基本的概念から論理的に導かれねばならないということである。」(pp. 268～269) ここで彼が地理学の基本的概念といっているのは「地域的相違」のことであるが，これから論理的に導かれるデータ選択の根拠としてヘットナーの見解を長々と引用し，次のように結論する。「地理的に考えるということは，現象をそれ自体独自的なものごととしては考えないで，地域によって相違する性格を決定する要素として考える。……ある地域に存在はするが，その地域の他の現象と関係のない現象は，地域的関連性のないものといってよく，それゆえに地理学とは縁のないものである。」(p. 274)

上掲のハーツホーンの見解を了解するとしても，ある地域では互いに関連しあっていて，地域が異なることにより相違する事象はまた多種多様であり，これまた無限に近いといってよい。したがってそれから選択する基準がさらに必要となり，彼の場合，それが何であるかがさらに尋ねられなければならないであろう。この点について彼は，ヘットナーの選択基準に含まれている三つの特定の考え方を重視すると，実用上価値のある概念を引き出すことができるという。「それは，(1) 直接または間接に地球に結ばれたいろいろ異なった種類の現象の相互関係; (2) これらの諸現象と，それらが相寄って形成している現象複合が地球上の異なった地域では異なった性格を有していること; (3) 現象または現象複合が空間的な拡がりをもった表現を有していることの3つ」であり，「これら3つの概念に照して意味のある現象だけが地理学的研究において記述され解釈されるべきである」(p. 274) というのである。しかも彼によれば，このような限定は地理学のこれまでの歴史的発展と矛盾しないのである。次にこれらの概念に関する彼の論述をみてみよう。

ハーツホーンによれば，現象を相互関係において考察するという考え方から，「地理学の研究対象を選択する場合の特殊の方法が与えられる」(p. 275)。彼の考えでは，ある地域の個々の現象は，他の諸現象との絡み合いの重要性に応じて，原因として前方にも結果として後方にも登場する。それゆえ，ある現象が地理学的に意味があるためには，「それが他の地域的諸現象と因果的に関連していなければならない」(p. 276) のである。つまり彼のいう特殊の方法とは，上述の意味での因果関係を見つけ出し，それによってデータを選択することなのである。そうだとすると，その際尋ねられなければならないのは，錯綜した現象間の因果関係はどのようにして究明されるのかということである。この点について彼は何も述べていないが，ヘットナーの見解に同調して引用している文章 (p. 273) から推察すると，研究者の学的修練の結果として体得した直感力によって主観的に判断されるようである。

しかし，そのような方法によって一地域で因果的関連をもつ現象複合が明らかにされ，それらが地理学の取り扱う事象であるとされても，その範囲はまだ極めて広く，しかも地理的知識の増進に伴って益々広がっていくことになる。したがって実際の研究では，さらに取り上げる事象を限定する必要が生ずる。ハーツホーンの場合，その主たる基準が前掲の第2概念であったと考えられる。というのは，この条件を導入することによって地理学は，彼が引用しているヘットナーの表現を借りると，「地球上どこででも同一であるような，あるいはその地域的差違がなんら分布の法則に適合しないようなすべての条件をオミットすることができるだけでなく，またその地域的相違が，すくなくともわれわれの知識の範囲内では，他の分野の現象の地域的相違と関連性をもたないようなすべての事物をも除外することができる」(p. 273) ようになるからである。しかし，このことが不当に誇張されて，単にもの珍らしいとか他の地域では一般的重要性があるとかいう理由だけで，それらの事物に関心をよせて

はならないとも注意する。彼はその理由を次の事例によって説明している。「人は，ポー川流域の地理を書いているとき，ごくわずかの米を生産するひじょうに小さい地区を，ただそうした地区がヨーロッパではまれであるという理由だけから詳しく述べたいという誘惑をしりぞけなければならない。そうでなければ，彼はとうもろこし一小麦一乳牛飼育農業と，ぶどう一果実一ナットの園芸農業とのはるかに重要で意味のある結びつきの意義を見失うことになるだろう。」(p. 278)

ところで，上掲の引用文の内容を敷衍すると，次のようにいえよう。地理学徒はまずもって，地域的相違の形成に係わる諸事象を第一義的事象と第二義的事象とにわけ，その地域の性格を規定する第一義的事象の結びつきを見出すのである。第二義的事象が問題になるのは，それが彼の研究している地域に有意味な場合だけなのである。その際，ハーツホーンの考えでは，物質的事象であれ，非物質的事象であれ，人間に関するもののみが第一義的事象となりうるのである。というのは，「人間の存在によって地域に与えられるところのものが地域それ自体の性格」(p. 279) だからである。しかも，「人間によって造られたり用いられたりするものは何であろうと，人間がそれを造ったり用いたりする地点において，地表上に特殊的に位置づけ」(p. 224) られており，それらはいずれも地域的表現を有しているのである。

このようにデータ選択に関するハーツホーンの見解をみてくると，結局のところ，人文地理学以外に真の地理学はないことになり，それが究明する地域的相違は，ある地域を他の地域から区別する差違というよりはむしろその地域を特徴づけている性格であるといえよう。次章では，このような性格を把握するために，ハーツホーンが地域をどのように考え，それをどのように区分しようとしたかをみることにする。

Ⅲ

これまで多くの地理学者によって，地域は実在であるとか，あるいは具体的客体であるとか，さらには生物的有機体に比較できる有機体であるとか主張されてきた。現在でもこのような見解を支持する学徒は少なくない。それに対してハーツホーンは，この概念がどのように表現されるにせよ，それは「自明でもなければ地理学的実地調査の成果でもない，いわば……仮説」(p. 285) にすぎないものだという。そして，「個性をもった具体的単元としての単一の地域が存在するということは，われわれはまだ実例を以て示してもらったことがないから」「その仮説の論理をいささか注意深く検討してみるのがよいだろう」(p. 291) といって，それらの主張に詳細な考察を加えている。その中でも特に，地域を具体的客体とみなす見解が地域地理学の全分野において根本的重要性をもつと考え，これを最も詳しく検討している。その全容を詳論するには別の機会を心要とするほどである。ここでは紙幅の都合で，本稿での検討に必要な項目に焦点を絞り，しかもその要点のみをみておくことにする。

ハーツホーンはまず，使用する言葉の意味あいを吟味し，それから「“地域” (region) を構成するようにある特定の方法で区画づけられた地表のある地域的部分が，形を備えたものであること，具体的単元をなす全体であることを論理的に証明できる」(p. 300) かどうかの検討に入っていく。彼は次のようにいう。「地域を（第一義的）全一体として考察すべきではないにしても，もしわれわれが地域を比較的閉された組織を形成している，互いに関連性のある諸要素の複合体……という意味での，少なくとも緩やかな閉鎖組織と考えることができるならば，それでもなお何物かが得られるであろう。このことがもしその通りでありさえすれば，地域は――地域内部の諸事物とは区別して――“構造と形態と機能と，またそれゆえに組織内において受持つ役割とを有する”と適切にいうことができる。これらの諸性質を有するためには地域は当然かなりはっきりした境界を持たねばならないし，またそれゆえに地域はひろがりという観点からのみ規定され得る。それはわれわれが相当はっきりした地域的限界を持たねばならないことを意味する。」(p. 305)

要するにハーツホーンは，境界の確立をもって地域が具体的客体であるための必要十分条件とするのである。しかるに彼によれば，すべての有意味な要素が“高い程度の連結的で不可分的な調和を有している”ように，地域の境界が確立されたことはただの一度もないのである。そのような可能性があるのは，「おそらく二つの自然的要素――とくに気候と地形――とがおしなべて斉一で，そしてその一つが他の諸要素の大部分を支配しているような」(p. 312) 極めて特殊な場合だけであろうが，たとえその場合に地域の境界が確立され得たとしても，それから引き出される結論が一般に有効であるかどうかということになると疑問がのこるという。つまり，「われわれは実際の実在としての地域を発見したわけでもなければ確立したわけでもないばかりでなく，そんなことをしようと予期する理由も持たないのである。」(p. 315) 結局のところ，「地球表面の諸区域を現実に単元を形成する地域 (region) と規定することは不可能」であり，「それらの諸区域を正確に具体的な，個性を備えた客体であると見なすわけにはいかない」(p. 322) のである。

上述のように結論づけたうえで，ハーツホーンはさら

に次のように論じていく。「しかしそれでもなお“何かしら地域的統一といった，さらには有機的統一といったようなアィディアがある”ことを感ぜられるであろう。われわれは広大な領域にわたっていちじるしい統一性のある外観を有している特別のタイプの地域——すなわち，砂漠とか熱帯雨林というような極端な条件の地域——について注目したが，しかしこれはただ一つまたは二つのファクターが優越しているために，その他の諸要素が比較的高い程度の同質性と単純な同位性とを持つことになっているからだと結論した。それといくぶん似たようなやり方で，われわれの地域地理学における仕事は，そのおのおのが自己内部で十分に組織づけがなされ，他とはっきり境界づけられるような，そのような単元地域をつくりだすことであるように思われる。」(pp. 315～316)

ハーツホーンの考えでは，地域を知的概念と結論することは，世界もしくはその各部分をいろいろな大きさの単元地域に区分するという課題を放棄したり，そのような区画づけの根拠を不要なものとみなすことにはならないのである。なぜなら，地域的相違を理解しようという地理学の根本的機能は，便宜的で恣意的な地域区分であっても研究上それを必要とするからである。したがってそのような地表の区画は単に“勝手に択ばれた土地のかけら”に過ぎないけれども，もし地域区分が「首尾一貫して保持される適切な原理に基づくものであるならば，勝手きままなものではなく，科学の一般的要求に合致するであろう」(p. 334) と彼は考えるのである。

ハーツホーンの観察によると，人間は自然景観を文化景観に変える際に，はっきり区別づけた土地単位をつくりだし，その各々の内部では同質性が得られるようにしようと努める傾向がある。このような景観は，自然はつくりださないのであって，人間のなせる仕業なのである。さらに彼によれば，人間は「ある限度内では明確な地域的単元を創りだすことも，それを構造的・機能的に組織づけて全一体 (Whole) にすることもできる」(p. 319) のである。現に人間は，特定の側面からみて全一体を形成しているものとみなしうるある形の地域的結合，たとえば“農場とか都市とかいった有機的空間単元”を創造しているのである。それゆえ，様々な文化景観を組織づけて全一体にする人間の役割に着目するならば，前述のような単元地域をつくりだすことができるのである。しかし彼の考えでは，それは寄木細工のように“高度に便宜化された非現実的な形式”にすぎないのである。

ところで，地域地理学のために単元地域をつくりだそうとするハーツホーンの上記の論述は，極めて限られた地域的結合の，しかも特定の側面に限定されているとはいえ，徹底的に葬り去った筈の具体的客体としての地域概念を蘇らせているのではないだろうか。いずれにせよ，このような疑問を人々に惹起させてまでして彼は，どのような単元地域をつくりだそうとしたのであろうか。次にこの点をみてみよう。

ハーツホーンはまず，地表上の実際の空間的配置のままの姿で特殊地域を確立するヘットナーの発生的方式について考察し，地域地理学が取り上げる諸要素のすべてをその根源にまで遡って追求することは不可能であるといって，この方式を退ける。次に彼は，関係位置とは無関係に，その場所の内部的特質だけの類似性に基づいて一般的地域に区分する比較的方式を検討する。まず自然的要素に基づく方式について考察し，自然環境の複雑さゆえに，この方式によって有意味な地域区分をうち立てることは不可能であるという。これらの検討を経てから彼は，文化的要素複合に基づく地域区分が可能であるかどうかという考察へ入っていくのである。

この考察にあたってハーツホーンは，様々な文化的側面の地域的相違が一致しないことを理由にして，地域地理学にとって最も重要な文化的側面，すなわち「限られた地域では比較的同質的であるが，異なった場所ではいちじるしく異なっている」(p. 383) ことに係わる文化的事象だけに考察を限定する。しかしこのように限定し，さらにデータの選択基準を適用して文化的事象の大部分を取り除いても，それでもなお地域によって著しく異なる莫大な数の文化的事象が残るのである。したがってそれらの中から地域区分の基準となるべき事象を何らかの原理に基づいて選択しなければならない。彼の考えでは理論的考察によって，「それ自体として大きな重要性を持っている規準，あるいは，ほかの多くの文化現象と深いつながりを持っているために，地域性を決定するのに全体として大きな重要性を持っているより大きな現象複合に対する鍵を提供するような規準」を見つけ出し，さらに「それらの中で，観察することができ，分類することができ，そしてある程度までは量的に測ることのできる規準だけ」(p. 385) を用いることによって，そのような事象を選び出すことができるのである。

この原理に導かれてハーツホーンが到達した結論は，経済活動がその基準にあたること，そしてその中の“農業的土地利用の集約度と利用法の差異”を拠りどころにすると，世界の陸地を「(1) 全然利用されていない土地——不住地域，(2) 人間が原生の野生動植物を利用している土地，(3) 地表が人間の耕作によって支配される土地」(p. 389) の三つの大きなクラスに分けることができるということであった。そしてさらに，彼はそれらの地域をより小さい地域単元に分割していくための基盤について考察している。彼の考えによると，野外調査によっ

て現在の地表上における諸事象の地域的結びつき（要素複合）が確立されるならば，それによって様々な地域単元の型を分類し，世界を大小の区画づけにまで持っていくことができるのである。そのことについて彼は詳論しているが，われわれにはそれをみる紙数が残されていない。しかしその必要もなかろう。なぜなら，それについて彼が叙述している二つの方式は，「いずれも可能であると思われる二つの土台の例」であって，しかも「どちらを土台にするにしても，ほかの学徒はまったく異なった特殊の基準を強調し，それによって，その性格において，また地域的輪廓において，まったく異なった組織をつくり出すかもしれない」(p. 420) からである。

漸くわれわれは地域区分に関するハーツホーンの結論をみる段階にきた。彼によれば，「われわれは個々の要素または個々の要素複合を基にして，望ましいと思うだけの数の地域的システムをうち立てることができるし，これらを相互に比較することもできる」(p. 418) のである。しかし，「自然にしても人間にしても，すべての地理的事象を総合することはしないから，すべての地理的事象を含む地域区分の単一なシステム」(p. 418) を確立することは不可能なのである。また，地域地理学において大きな重要性をもっている，一つの場所のほかの場所との関係位置 (locus) というファクターは有限の数のシステムには分類されえないので，この点ではどの地域もユニークであるといえる。「それゆえ，ひとたびこのファクターが導入されると，われわれは地域を分類する方式から，特殊の（具体的な）地域をそれらが実際に位置づけられているままに認識する方式に移らざるを得ない」(p. 422) のである。つまり，「類型に地域を分類する方式はせいぜい特殊地域を認識するという最終的課題にアプローチする方法をわれわれに与えるにすぎない」(p. 422) のである。そして，この実際的方式によってつくりだされた地域組織は，「知識を求めるための基本的な枠組みではなく」「それまでに獲得された地域的知識を記述するための論理的組織」(p. 419) にすぎない，というのが地域区分に関するハーツホーンの結論であった。

Ⅳ

ハーツホーンは，景観論批判を論旨展開の基軸にすえて，『地理学の本質』の叙述を進めている。彼の見るところによると，“景観至上主義者”がその理論的叙述において地理学の取り扱う事象を“感官によって知覚することのできる事物”に限定しようとする考えの根底には景観の意味での Landschaft 概念があるのである。それゆえ，彼はまずドイツ語の Landschaft という用語の意味を詳細に検討し，それの言語的混乱を明らかにしたうえで，地理学の研究を進めていく際に非物質的事物について考察することが必要不可欠であると主張したのである。そしてさらに，有機体ないし具体的客体としての地域概念を退け，その代りに地理的知識を組織づけるための知的な枠組みとしての地域概念を提示し，地域的相違の究明をもって地理学の究極的目的としたのである。

上記のことに関連してハーツホーンは次のように論じている。「彼らは地理学概念を他のすべての科学概念から区別する唯一の本質的要素である，地表上の事物の関係的位置を相互の関連において常に考慮するということを明らかに見失ってしまっている。この関係位置というファクターを見落す傾きは非物質的要素を“第一義的地理的事実”として考察することを拒否することから生じた結果であり，……それはまた以上に加えて，しかもとくに，地域それ自体を比較的閉ざされた単元として考察することから結果していると考えられる。一地域の諸事象をただその地域内部の事実としての観点だけから解釈しようと試みるときは，位置という要素は内部的事実としての位置に貶されてしまう。……そもそも地域というものは単元としては相互に関係を持たないのであって，地域内部の特定の要素および要素複合が他の地域内部の特定の要素および要素複合と関係するにすぎないのである。」(pp. 322～323)

要するにハーツホーンによれば，「地域それ自体とその内部の現象との関係は，地域がそれらの現象を地域内部のどことどこの場所に内包しているということ」(p. 458) を表わすにすぎないのである。同じく，「われわれが地域単元間の関係と漠然と称している関係は実際はある地域内のいくつかの要素と，別の地域内のいくつかの要素との間の関係以外の何物でもない」(p. 458) のである。そうだとすると，われわれ地理学徒が第一義的になすべきことは，地表上における事物の空間的配置について考察することでなければならない。さらにいうならばわれわれは，決して「地域」そのものではなく，そこに展開する諸事物の空間的側面，すなわちその立地，その広がり，その空間関係，およびそれらの過程について研究するのである。逆にいえば，究明しようとする事物の空間的側面が把握できるように，地域区分ないし地域設定は行われなければならないのである。

このようにみてくると，地理学における「地域」概念は，斯学の研究対象の事実的な何かをでなく，第一義的にそのものがいかにあるかを特徴づける方法概念であるといえよう。つまりそれは，地表上での諸事物の空間的な在り方を把握するための知的な枠組みなのである。そして，この概念が地理学の本質を包括的に規定するよう

になれば，それは単なる技術的操作から遠ざかって，事物そのものの在り方との対決において，その空間的側面を明らかにすることができるのである。しかし，このように地域概念を定義づけると，それはわれわれが先にみたハーツホーンの地域概念と相違することになる。彼にとって地域は，新たな知識を求めるものではなく，既に獲得された知識を組織づける知的な枠にすぎないものであった。このような違いが生ずる理由をハーツホーンの展開する論旨全体のなかでいささか再考してみたい。

ヘットナーの科学分類に同調してハーツホーンが引用している文章の論旨に従うならば，実在の全貌は系統科学，歴史科学および空間科学の三つの観点の地平においてはじめて理解される。逆にいえば，これらの三つの科学はいずれも実在の一面をとらえているにすぎないのである。このように時間と空間とを峻別する観点の区分，したがってそれにもとづく科学分類それ自体は支持し難いものとはいえ，そのことが意味する内容を敷衍すれば次のようにいえよう。すなわち，すべての個別科学は同じ一つの世界に対して，それぞれに固有の基本概念ないし範疇組織（方法）によって規定された切断面をとりだし，この切断面（対象領域）において世界の一部分を考察しているのである。そして，このように方法的に限定されていることが，その科学が真に科学的でありうるために必要な条件であり，また個々の科学の独自性を特徴づけているのである。地理学は，そのような諸科学の一つであって，決してそのなかで特別の地位を占めるものではない。それは，地球の表面上における諸事物の空間的ないし地域的配置と秩序とに関する科学なのである。それはまた，ハーツホーンがしばしば用いる歴史科学とのアナロジーでいえば，地球上の異なった場所と場所との間の関係や，同じ場所における異なった事物の結びつき，つまり部分地域の構成ないし体系や，地域の構造ないし均衡関係について研究する科学であるともいうことができる。そうだとすると，地理学が究明すべき“地域的相違”というものは，それぞれの地域における同じ事物，あるいは異なった事物の空間的配置ないし結合の仕方に伴って生ずる“差異”に限定されなければならない。この限定こそが重要なのである。なぜなら，科学は常に分科としての学であり，それぞれ特定のものやことについての学だからである。地理学もこの例外ではありえないのである。そして，このように限定することによって地理学は，他の社会諸科学と同じように，地表上における諸事物の空間的側面を規制する法則を追求することができるようになるのである。逆にわれわれは，この法則という形の一般化を通じてそれぞれの地域の特殊性を理解し，説明することができるのである。しかるにハーツホーンは，地域の本質を“ユニーク”なものと考えて，そのような法則の追求を退け，さらには折角捜し求めた立論からも飛躍して，地域的相違そのものの究明をもって地理学の究極的目的としたのである。それゆえ，われわれとしては次に彼が地域をユニークなものと主張する根拠を吟味してみなければならない。

ハーツホーンによれば，「ある地域の本質的事象は世界のほかの地域との関連におけるその位置 (location) である」(p. 422) という。そして，この「関係位置すなわち locus という点では，どの地域もユニークである」(p. 422) というのである。そうだとすると，われわれとしてはこの関係位置の概念を吟味しなければならないことになる。これについて彼は次のように論じている。「もし地理学における自然的要素と文化的要素とを区別したいということであれば，関係位置すなわちローカス (locus)——relative location を縮めた形——は本質的には，“交通の便”とか“市場への近接性”といったような語句から察せられるような文化的要素ではなくて，自然環境の中に備わっているものである。……あるいはわれわれはこのファクターを，地域の自然的事象にも文化的事象にも属さないが，しかし地域という複合体を形成している事象間の結びつきを解釈するにも，個々の事象を地理学的に解釈するにも欠くことのできない幾何学的 (geometric) ファクターとして認めねばならないかと思われる。」(p. 326)

上掲の引用文によると，ハーツホーンは関係位置を自然的要素あるいは幾何学的ファクターとしてとらえているかのように思われる。しかし，この二つはその本質を異にするものである。というのは，自然環境内における位置は具体的な時間と空間とに規定された地表上の位置であるのに対して，幾何学的な位置は時間と峻別された抽象的な空間内の位置にすぎないからである。この二つが同じ性質のものでないことはハーツホーンも気付いているようである。このことは，上掲の引用文の内容を同書の論旨全体のなかに位置づけ，それを注意深く読むことにより知ることができる。まず彼は関係位置を文化的要素とみなすことに反対しているが，この理由を推察するに，社会的内容が付与された位置というものは抽象化を可能にし，既に立地論や中心地理論などにおいて行われているような演繹的な理論の構築を可能にするからであろう。つまり地域をユニークなものと主張し，法則の追求を退ける根拠を失うことになるのである。しかし，そうだからといって彼には，“関係性の原理の信奉者たち”のように，関係位置を環境に備わるものと積極的に主張することもできない*。なぜなら，彼は環境論を地理学の歴史的発展コースからの偏向として批判し，さら

に地理学の取り扱う第一義的事実から自然的事象を排除しているからである。それゆえ，もし“地域の本質的事象”である関係位置を自然的要素とみなすならば，彼の主張は矛盾することになろう。このような矛盾に陥ることを避けるために，彼は巧みな叙述表現によって関係位置を“地域の文化的事象にも自然的事象にも属さない幾何学的ファクター”として位置づけているのである。

このように，関係位置の概念が幾何学的位置にまで還元されると，地表上のそれぞれの地点の間には，無限の位置のネットワークが成立し，その意味において各地点は唯一性をもつといえる。それは，ハーツホーンがいうように「言葉では適切に表現されうるものではなく，地図上――いな，むしろ地球儀上――で示されうるにすぎない」(p. 422)。それゆえ，もしこのような関係位置によって地域が意味づけされるならば，それは確かにすべて全く特殊でユニークなものだといえよう。しかしこのようなユニークさの意味づけは，ハーツホーンのいう地域概念に照らしてみると，無意味なものになりはしないであろうか。というのは，彼にとって地域は知的な枠であって，その実体は選択基準によって選ばれた諸事象の複合体だからである。そのような有限の事象が地表上の無数の地点の事象と有意な関係をもつことはありえないからである。

以上の考察によって地域は，ハーツホーンがいう意味でのユニークさを備えていないことがわかる。このことは，地域に関する法則の追求を退けようとする彼の考えに根拠がなくなることを意味する。しかし，そのことはまた地域的相違そのものの究明をもって地理学の任務としようした彼の意義づけの試みが不成功に終ったことを意味するにすぎない。シェーファがいうように，ハーツホーンの要求は過大なものかも知れないが，それはこれまで多くの地理学徒によって支持されてきた考えであり，最近の学徒の中にもそれを支持するものは少なくないのである。それゆえ，「地理学とは地理学者のなすことである」というウイルソン Wilson (1972, p. 33) の見解に従うならば，ハーツホーンが提唱する地域地理学もまた地理学であるといえよう。それは現在のところ論理的な位置づけを欠いているが，われわれはポパー Popper (邦訳, 1961) のいう“選択的接近法”の中にそのような位置づけの基盤を見出すことができるように思われる。ポパーは，歴史法則を追求するヒストリシズムを批判する一方において，そのようなアプローチを排除していくために“事態の論理の分析”と“選択的接近性”とを提言している (pp. 222～229)。そのうち，後者について彼は次のようなことを述べている。

理論的科学においては，理論仮設を導きの糸として資料の選択・観察・測定が行われる。それに対して歴史学では通常，普遍法則というものが些末で無意識にしか用いられない。これは理論仮説のような機能をはたしえない。それゆえ，これに代るものがなければ，研究者は貧弱で支離滅裂な資料の洪水に窒素させられることになろう。それから脱却する唯一のやり方は，自己の歴史叙述のなかに“あらかじめ考えられた選択的見地というもの”を意識的に導入して，この見地に関連する資料をできるだけ客観的に（科学的客観性の意味で）考察し，この見地の下で歴史的事実を構成し叙述するのである。このことは，われわれの関心をひかない事実や側面のすべてについて，われわれは心を労する必要がないことを意味する。したがってそこに得られた歴史叙述は決して唯一無二のものではない。それらの歴史的「接近法」もしくは「見地」自体は決して客観的でもなければ，通常テスト可能でもないからである。しかし，「その見地を明白に言い表わし，それが多くのもののうちの一つであること，そしてその見地が理論の形態をとる場合にも，それがテストしえないものであるかも知れぬ，とつねに意識しつづける」(p. 229) ならば，そのような歴史叙述はすぐれた歴史解釈として評価されうるのである。

上記行文中の「歴史」という用語を「地理」におきかえてみると，その筆法はハーツホーンが地域地理学について論じた筆法に符合するものだといえよう。そうだとすると，われわれは奇しくも「新しい地理学」の旗手たちが依拠する「現代の科学哲学」の中にハーツホーンが

---

* 例えば，ラッツェル Ratzel (1882) がその主著『人類地理学』において，コントとその後継者たちが専ら人間に対する気候と食糧の影響を考えて，土地が有する意義を評価していないと論述している箇所に，われわれはそのような関係位置の概念をみることができる。彼は次のようにいう。「彼らは太陽に対する土地の位置あるいは気候帯 (Zonenlage) にもとづくところの環境の影響のみを考察している。一つの土地や民族が他のそれに対して直接関連する位置の概念，すなわちさまざまに変わる隣接位置の概念を看過しており，そして密接な関係がより少ない，空間の作用にいたってはなおさらである。」(S.17～18) なお，彼の考えでは，空間や土地は環境とは切り離すことのできないものであった。人口の増加とそれに伴う食糧需要の増大とに帰しうる社会的競争を，コントが人間社会の発展に影響する二次的力として認めるのを批評して，彼は次のようにいう。「彼はこのような力を完全に環境のなかに包摂することができたであろう。というのは，それは環境の基本的事実，すなわち空間あるいは大地の大きさに帰するからである。人類と大地との間の関係から生まれる最も重要な結論の一つとして，空間は第一番目の位置におかれるが，しかし環境とは切り離すことはできない。」(S. 20)

提唱する地域地理学の論理的な位置づけの基盤を見出すことになる。このことは，地域地理学ないし地誌が地理学の全体系の中で中核的地位を占めるものではないにしても，放棄されるべきものでもないことを意味する。しかし，そのためには今後，ヘットナーの場合と同じく，「地理学と歴史学を峻別したことから生まれる地理学の社会科学的観点の欠除，したがってまたそれ以来発展した歴史社会的観点に立つ地域研究を方法論上包摂できないという欠点」(松井，1966，p. 213) を解決していく必要があるように思われる。

昭和41・42の両年度に松井武敏教授は，本稿の脚注のなかで筆者が引用したヘットナーとラッツェルの二つの文献を名古屋大学院生の原書講読のテキストに採用された。何分にも語学の不得意な筆者がこれらの文献に接することができたのは，ひとえにこの授業のおかげである。ここに記して感謝の意を表します。

引 用 文 献

松井武敏 (1966)： Hettner の地理学の見解に関する断想。名古屋大学文学部研究論集，史学 14, pp. 207—16。

Hartshorne, R. (1939)： The nature of geography. A. A.A.G., Vol. 29, pp. 171—658. (邦訳) 野村正七訳 (1957)：『地理学方法論』朝倉書店。

Hettner, A. (1927)： Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden. Breslau.

Popper, K.R. (1957)： The poverty of historicism. (邦訳) 久野収・市井三郎訳 (1961)：『歴史主義の貧困』中央公論社。

Ratzel, F. (1882)： Anthropogeographie 1. Stuttgart.

Schaefer, F. K. (1953)： Exceptionalism in geography: a methodological examination. A. A. A. G., Vol. 43, pp. 226—49.

Wilson, A. G. (1972)： Theoretical geography: some speculations. Trans. of Inst. Br. Geogr., No. 57, pp. 31—44.

追記：紙幅の都合で，本稿の作成にあたって参照した文献名と脚注の多くを割愛した。このことを記しておきたい。